

## 地を掘る人

水野仙子

病院から下つて、またしくじつて、田舎の實家の天井の煤けた一室に寝てゐるうちに、もう三月近く経つて了つた。降らなくとも曇つたり、木の葉や草の葉が露つぽかつたりして、桑の賣買の事がよく耳にはいる。そして夜はよく眞暗な空を——眞暗に思へる空を閑古鳥が啼いて行く。かういふと大變閑靜な田舎のやうに聞えるけれど、私の家はあきんどやで、またこのぐるり四方みんな商人の家である。朝に晝に晩に、聞くともなしに私の耳に入るのは、高いとか安いとか、上つたとか下つたとかいふ物價の話が、景氣だの不景氣だのといふやうな言葉で、私がぼんやり空想したり、靜かに何をか考へたりしようとするのを、片つぱしからぶちこわして行く。それが煩くてならなかつた。けれども周圍は遂に私を征服した——のか、それとも亦私が解脱したのか、此頃は大分平氣に聞き流されるやうになつたし、そればかりでなく、寧ろこちらから耳を傾ける事もあ

ゐるのを見ると、自分達は今迄ほんとうにたゞ買ふ事より外には何も知らなかつたと思ふ。買ふといふ事は私にとつて價を知る事ではなく、たゞ要求されたゞけの價を拂つて來る、其額高を知るに過ぎなかつたのだ。だから毎日何圓お米を喰べたかは知つて居て、お米が一升幾らするかを知らないで過したのだ。(恐らく此後だつてもさうだらうけれど) しかし何事によらず、ものゝ眞實の値打ちを知るといふ事は大事なことのやうに思はれる。さうすれば物を粗末にしないだらうし。又或る物に對して自然尊敬する事が出来るやうにもなるのだと思ふ。

やはりあきんどの一人が來ての話。戦争の影響と物價騰貴とにつれて、總ての屑物にも値が出て來たので、これまで何の役にも立たないものとされてゐたブリキ屑や瓶カケなどが、どん／＼小問屋大問屋に買ひ込まれるやうになつた。殊にブリキ製といへば、私達はあるまりさう上等のものにも思はなかつた其ブリキが、どうしても日本では出來ないのださうで、ブリキのもてる事は夥しい。以前には、塵溜めといへば何處の塵溜めにでも、罐詰の罐などがゴロ／＼してたものだけれど、此頃は何處を探してもそんなものは落ちてゐないといふ。それを拾つて歩く

のを商買にしてる者が随分あるんださうだ。ところで、此頃何處からともなく一人の「地を掘る人」が此町に現はれて來た。

「地を掘る人」といふと、なんだかミレエの畫題でもありさうで、強烈な眞夏の日光を、垂れ下つた帽子の庇に受けながら、力瘤の満ちた腕に鶴嘴をふるつて、大地を發掘してゐる大きな男の畫面が目に泛んで來る。けれどもこゝの「地を掘る人」は少しく非藝術的で、餘りに切りつまつた世間の状態で、現はしてゐる。其男は、墓地のかげとか、或は崖の下のやうな、以前塵を捨てたやうな所を見立て、(大抵一目睨めばわかるのだといふ)地下四五尺も掘り下げるのださうだ。すると小判がザク／＼出るやうに、でもまさかないだらうけれど、兎に角前に埋めたてた塵塚から、ブリキ屑や、硝子片、壘片、時には眞鍮ものや鐵杯の金屑が發見されたりするので、日によると六七十錢にもなる時があるし、少くても三四十錢の仕事は出來るのだといふ。

私は其話を陰聞きして、鶴嘴とシャベルを擔いで地を掘りつゝ町を渡つて行く男の姿を想像しながら、ひそかに思つた。それはもう廢物利用の域を通り越して、其男の發見した一つの事業になつてゐる。さうして其發掘の投機

的事業には、金力も要らなければ又他の力を借りるにも及ばない。たゞ彼の腕の力によつて、幾らかの汗を流せばそれが出來るのだと。

とにかく、何物でも隠れたものを掘り出して、其物を役に立てるのはいい事だと思ふ。「それは大きな價值のあるものを掘り出すに越した事はないが、たとひまた小さな價值のものでも、それを捨てるよりは先づ手近から、自分出來るだけの力でそれを掘り出せ。」と私は寢てゐる自分に言ふ。

○

此頃は大分工合がいゝやうだけれどしかしどうしてかうまだ寢てゐるのが樂なのかしら。「今に脊中に足が生て、それが下駄を履いて歩くやうになつて了ふよ。」と、私は私に笑戲を言つてゐる。又かうして寢ながらももの書き馴れて、それが癖になつて、丈夫になつてからも、何か書く時には机に向ふよりも、寢なければ思ふやうに出來ないやうな事になりはしないか、などゝ愚かな心配をしたりしてゐる。兎に角今度は快くなる事が出來るのだと思つてゐる。それを確實にしてはならない。ちは、さう言ひ切るのは恐ろしいけれど、其希望によつて、私は神妙に其時期が來るのを待つてゐる。この病床を踏み出しの起點として、如何に此後を

生きて行くべきかに思ひ浸りながら。  
善い刺戟でも悪い刺戟でも、其刺戟を避けて、暫く何も讀まないでゐる。私は文壇を正視して居ない代りには、また横目にも白眼にも見て居ない。ただ靜かに目をつぶつて、海の遠鳴りでも聞くやうに、微に文壇の聲々を聞いてゐる。私はまだ／＼目を開いて見やうともしずに、絶えずこんな事を獨りごつてゐる。「たとひお前が目を開いて何を見、何を聞いても、何もお答へでない、黙つて自分の仕事をおし、正直に、それを伶俐な正直よりは、寧ろ馬鹿正直にやつて行かうと心掛けるがよい、そういふお前の存在を人が認めなくとも平氣でおいで、その代りには、お前も亦さういふ人には無關心であつてよい、亦お前を嗤ふ者を見向くな、たゞ正直に、馬鹿正直に、すべてがお前の自由になる時でも今のやうに無慾でおいで、そして黙つてお働き、仕事で勝たうなどゝも、そんな餘計な事は考へなくともよいのだ、お前は決して結果を考へるには及ばない、たゞ自分のやらうと思ふ事をおやり。黙つて！靜かに、黙つて！」

恐らく、私はやつぱり此後とても、夫を發表すると否とに係らず、何かしら書く事をやめないのだらうと思ふ、何も知らない、知らうと思ふだけのこ

とすら満足に知り得ない自分ではあるけれど。さうして依然としてぎこちない、垢ぬけのしない、智慧の足りないものを書くのだらうと思ふ。けれどもそれは私にとつて自然であり眞實である事だけ、知つてゐる。

何でもいゝ、とにかく私は、黙つて、靜かに、もつと／＼我が足許の土を掘らなければならぬと思ふ。(病床にて雨の音を聞きつとつれぐ／＼に)

入力者注・・

底本は総ルビですが、ふり仮名は「え」の変体仮名は「え」に置き換えました。

底本・・讀賣新聞

大正六(1917)年七月一日朝刊

テキスト入力・・小林 徹

公開・・平成二十九年十月二十九日

最終改訂・・令和五年六月二十二日

[リンク・・水野仙子ホームページ](#)